様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　5　月　20　日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０１３４
研究課題名（和文）「近代文学」派と近現代日本文学研究の方法

研究課題名（英文）　Research Method on “Modern Literature” School and Modern and Post-modern Japanese Literature

研究代表者
小嶋　知善（KOJIMA　TOMOYOSHI）
大正大学・文学部・教授
研究者番号：００３６５８５０

研究成果の概要（和文）：
本研究は、雑誌「近代文学」を創刊して戦後の文壇で評論家として活躍した「近代文学」派に着目し、彼らの文学研究方法を明らかにしようとした。研究方法としては、彼らの評論や研究に影響を受け、さらに自身の研究領域で研究方法を探究してこられた研究者たちにインタビューをして考察を行った。その結果、「近代文学」派の人々が、大学というアカデミックな場に教員として身を置いたことで、近現代文学の研究の成果（実証的側面など）を取り入れて、その評論や研究における客観性や論証をより強固なものにしていったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This research focuses on the fact that “Modern Literature” School published a magazine titled “Modern Literature” and made a spectacular showing as a critic in the post-modern Japanese literary world. This paper tires to clarify the research methods used on this literature. Interviews were given to researchers, who were influenced by the critics and research of “Modern Literature” School and who have pursued their own research methods in their own fields. Consequently, this research has made it clear that researchers of “Modern Literature” School adopted the results of the research on “Modern Literature” (from the demonstrative aspect) and to consolidate their objectivity, teaching as they did as teachers at universities where an academic environment was provided.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	４００,０００	０	４００,０００
２００７年度	４００,０００	１２０,０００	５２０,０００
２００８年度	４００,０００	１２０,０００	５２０,０００
２００９年度	３００,０００	９０,０００	３９０,０００
年度			
総　計	１,５００, ０００	３３０,０００	１,８３０,０００

研究分野：日本近現代文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：（１）戦後文学（２）「近代文学」派（３）文学研究の成立（４）解釈学的批評（５）第一次戦後派（６）久保田正文

１．研究開始当初の背景

20世紀後半、欧米での文学理論を含めたさまざまな知のパラダイム転換が生じ、日本の文学研究においても1970年代後半よりその影響を受けることになった。70年代中ごろまでは、高等教育の制度的発展成長のなかで、文学関係学科は総合教養教育を担うものとして拡大拡充されてきて、いわゆる文学研究を支えてきた市場のひとつでもあった。しかし、教養的な分野自体も教育サービスのなかで細分化されていき、大学の学科専攻が多種多様になっていった。

一方、学問領域そのものにおいても、文献実証主義的な解釈学を中心とした日本古典文学の研究では、発掘される文献資料そのものが少なくなったこともあり、本文校訂を中心とした実証的解読研究からテクスト論的な立場での解読研究も見受けられるようになる。近現代文学研究の領域では、研究者の世代交代や研究拠点としての高等教育機関の地域拡散のために、実作者と研究者との関係が希薄になったことも、テクスト論的な立場での解読研究への傾斜が生じた一因であろう。1980年代に入ると、さらに研究方法の多様化が展開し、テクスト・語り・視線・時間・空間など、従来の研究にはなかった用語、あるいは少し異なった意味での用語が論文等に頻出するようになる。1990年代では、バブル的な大学の拡張のなかで、従来の総合的な教養教育としての文学関係学科専攻は衰退した。2000年以降、少子化による大学進学者数の減少が大学経営危機を招き、さらに文学関係学科専攻は減少傾向となり、近現代日本文学研究の沈滞化も取りざたされた。その一方で、近現代日本文学研究の多様化した研究スタイルは、さまざまな他の隣接学問領域との交流を図りながらも、研究の活性化が試みられている。

こうした近現代日本文学研究の現状を踏まえながら、近現代日本文学の研究スタイルが成立した第二次世界大戦後の国文学科での研究教育内容の一端を文献や証言をもとに明らかにしようとした。

２．研究の目的

本研究は、大学における近現代日本文学研究のスタイルや方向に少なからず影響を与えた「近代文学」派に焦点を絞って近現代日本文学研究の問題点を探ろうとするものである。

雑誌「近代文学」は、昭和２１（1946）年に発刊し昭和３９（1964）年終刊までに１８５冊を発行した。創刊同人は、荒正人・小田切秀雄・佐々木基一・埴谷雄高・平野謙・本

多秋五・山室静の７名で、世に〈「近代文学」の七人のさむらい〉と呼称されている。

この７名は、それ以前に「批評」「構想」「現代文学」などの同人誌で文学的・精神的な交流をしていた。三好行雄氏の評言を借りれば〈彼らが青春の形成期にマルクス主義の洗礼をうけ、革命運動の挫折を目撃したことと、それに続く戦争の「暗い谷間」に耐えた心理的抵抗とを共有の原体験とし、その内容要請にもとづく独自の発想が雑誌の性格を決定した〉と言える。

彼らの果たした文学的な仕事としては、文学者の戦争責任の問題・世代論・主体世論・エゴイズム論・旧プロレタリア文学批判・政治と文学の問題・日本近代作家の再評価などが挙げられる。雑誌「近代文学」は、この雑誌の主張に共感し触発された文学者を次第に増やし、戦後文学の主軸となりその推進的役割を担った。

この雑誌は昭和２２年７月、２３年６月に二度にわたって同人拡大を行い、野間宏・中村真一郎・福永武彦・加藤周一・大西巨人・花田清輝・久保田正文・椎名麟三・梅崎春生・武田泰淳・安部公房・三島由紀夫など、戦後文学の有力な作家・評論家を同人に加えた。そして、戦後の文壇をリードする新しい作家や評論家を育成した。雑誌「近代文学」は、明治時代の「文學界」・大正時代の「白樺」などと同様に、戦後の文学的方途を決定した重要な雑誌となった。

上記「近代文学」創刊同人７名のうち埴谷雄高を除く６名は、後に大学教員となりアカデミックの立場から近代文学を講じた。雑誌「近代文学」で戦後の文壇と文藝批評をリードした彼らは、近現代文学が大学で学問として本格的に講じられるようになる段階において、文学研究者としての役割も果たした。彼らが開拓した研究スタイルや関心の領域は、現在の近現代文学の研究方法に少なからず影響を与えている。大学という研究環境において彼らが果たした成果の考察は、現在に至る近現代日本文学の研究スタイルの究明につながるのではないかという予見から、この研究は計画された。

３．研究の方法

（１）本研究は、「近代文学」派の評論や研究を次世代の研究者がどのように評価しているかという観点から研究を進めた。その方法として、学会で活躍されてきた近現代文学の研究者に直接インタビューをする方法を取った。

（２）雑誌「近代文学」の創刊同人たちと極めて親交が深く、この雑誌の同人拡大に際して同人として加わり、また、雑誌創刊同人たちと同じく大学の教員ともなり、文学研究と文藝評論活動を行った久保田正文に注目し、その文学活動と研究活動の実態を明らかにしようとした。具体的には、久保田正文の未刊行評論や研究論文を探求し、著作目録や年譜や解題を作成することで、文学活動と研究活動の関係を明らかにしようとした。

４．研究成果

（１）インタビューの成果

①近畿・関西の近現代文学研究の初期の段階から自身で関わってこられた二松学舎大学学長今西幹一氏に、インタビューを行った。（平成 19 年 1 月 20 日）。

今西氏は高校時代短歌の魅力に惹かれたそうであるが、大学では指導者に恵まれず、卒論では結局松尾芭蕉を研究したとのことである。しかし、短歌のことがあきらめきれずに、本格的に研究すべく大学院に進学し

た氏は、図らずも、大学・大学院を通じて近代文学の講座ができる時期に立ちあうこととなった。その結果、近代文学に接近していくこととなったとのことであった。

　このインタビューを通じて、出身校の関西学院大学を中心とする関西地方の大学に近代文学研究が根付いていく過程が理解できた。今後、関東の近現代文学研究の進展との比較検討の材料となるものである。

②北海道の近現代文学を切り開いてきた元北海道大学教授神谷忠孝氏に、「近代文学」派の人たちの評論家活動や文学研究について、さらに、ご自身の研究活動について伺った。(平成19年3月28日)。

　伺った項目は、次のようなものである。「近代文学」派グループの評論および文学研究法をどう評価するか。保田與重郎・日本浪曼派・三島由紀夫研究のこと。無頼派・ダダイズム研究について。南方徴用文学に関する研究について。雑誌「北方文芸」と北海道の文学状況について。ご自身の研究領域の確立の経緯などについて。

　このインタビューによって、神谷氏が「近代文学」派の評論を愛読しつつ、独自の研究領域を開拓してこられたことが分かった。

③法政大学で教鞭を執る一方、文藝評論家としても活動しておられる勝又浩氏にインタビューを行った。(平成20年3月8日)。

　勝又氏はご自身の法政大学学生時代に、「近代文学」派の一人である小田切秀雄の薫陶を受けられた。また、久保田正文が法政大学に出講したときに面識を得て以来、久保田からも少なからず影響を受けている。

　このインタビューは、小田切秀雄・久保田正文の人となりやその仕事のこと、平野謙・本多秋五など「近代文学」派と近代文学の研究について、また、日文協・歴社会学派・知識人の責務・現代文学の今後の行方･大学での近現代文学研究の状況などを伺った。

　また、ご自身の文学との出会い、特に小林秀雄からの影響、そしてご自身の文学研究などについてもお話し頂いた。

④帝京大学名誉教授の佐藤勝氏は、「日本近代文学会」創立の主要メンバーである。佐藤氏にはその経歴を踏まえてのお話を伺った。(平成21年3月20日)。

　陸軍幼年学校の体験、旧制中学、高校、そして東大へと進学する過程での文学との出会いなどから伺った。

　大学では近代文学の授業がなかったので、自主的な勉強会を開いたこと。その中で、後に東大の近代文学の初代専任教授となる三好行雄氏らと交わり、各自の論文を読み合って切磋琢磨したことなどを明かされた。

　大学時代の文学思潮の中で「政治と文学」「実行と文学」の問題なども、自身がおかれていた状況に引きつけて考えざるを得なかったことなどを話された。さらに、官学と私学の文学研究や体制の違い、教育の違いなども伺うことができた。

　以上、①～④のインタビューによって、「近代文学」派の評論や文学研究は、後進の文学研究者を刺激し、文学研究の可能性を新たに切り開いたということが分かった。その一方で、「近代文学」派の評論家が大学教員の職を得て文学研究に手を染めたとき、既存の国文学の実証的で手堅い文学研究

の方法を取り入れたことで、自身の評論や研究における客観性を、より強固なものにしていったことも分かった。
　強いて述べるならば、小田切秀雄・山室静らは、大学教員および文学研究者としての側面が強く、平野謙・本多秋五・佐々木基一・荒正人らは評論家としての側面が強い。久保田正文はその中間に位置づけられるのではなかろうか。

（２）野間宏・武田泰淳の作家研究の成果
①「近代文学」派の評論家と親密な交際があり、また雑誌「近代文学」の同人拡大にあたって同人にもなった、作家の野間宏と武田泰淳について研究論文を発表した。
②野間宏については、「近代文学」派の平野謙・本多秋五・埴谷雄高などが優れた評論を書いており、武田泰淳については、佐々木基一・本多秋五・埴谷雄高らが犀利な評論を発表している。野間宏・武田泰淳の文学研究は、「近代文学」派が先鞭を付けており、同世代である彼らは、同時代の文学的思潮を共有していると言えることが明らかになった。

（３）『久保田正文著作選　文学的証言』（大正大学出版会、2009）出版の成果
①久保田の文学活動について、未刊行の文藝評論を中心に一巻本の選集（A５判、690 頁）を編集し、詳細な著作目録（67 頁）を作成して付した。さらに、年譜（7 頁）と久保田の文章の解題（25 頁）、口絵写真（4 頁）も掲載した。
②上記著作を久保田正文と生前に親交のあった瀬戸内寂聴氏・高井有一氏・佐木隆三氏らの作家、秋山駿氏・立石伯氏・勝又浩氏らの文藝評論家、紅野敏郎氏・谷沢永一氏・中山和子氏らの近代文学研究者、および国会図書館・日本近代文学館・神奈川近代文学館などに寄贈した。また、久保田が教鞭を執った大正大学・早稲田大学・法政大学・日本大学などの大学図書館、久保田が校歌を作詞した天龍中学校などにも寄贈した。
③上記著作については、『東京新聞』2009 年 8 月 6 日夕刊のコラム「大波小波」欄で紹介された。さらに、『信濃毎日新聞』からは直接取材を受け、2009 年 10 月 14 日刊に記事として紹介された。
④上記著作の著作目録や解題によって、久保田正文が評論活動と大学教員としての職務を両立させようとしていたことが裏付けられた。久保田は、大学教員となってから国文学関係の論文も多く執筆している。さらに、作品の初出や年譜的な事柄に対しての言及が多くみられることも明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）
① 小嶋知善、野間宏『わが塔はそこに立つ』論―海塚草一の選択をめぐって―、大正大學研究紀要、査読無、92 輯、2007、69－92
② 小嶋知善、私小説・理論と実作―武田泰淳―、私小説研究、査読無、8 号、2007、38－39

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計　１　件）

小嶋知善，久保田正文、大正大学出版会、久保田正文著作選 文学的証言、2009、583－690

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

小嶋　知善（KOJIMA　TOMOYOSHI）
大正大学・文学部・教授
研究者番号：００３６５８５０

(2)研究分担者

江藤　茂博（ETOU　SHIGEHIRO）
二松学舎大学・文学部・教授
研究者番号：８０２１３５５２

(3)連携研究者

藤村　耕治（HUJIMURA　KOUJI）
法政大学・文学部・准教授
研究者番号：００３２８９１５